

宇野千代という自由

Uno Chiyo -- Unbound

永田円了

人は誰しも、何かに縛られて生きている。世間の目、他人の評価、過去の悔恨、そして、自分でつくり上げた「こうあるべきだ」という思い込み。目には見えないその縄を、私たちはいつの間にか、自分自身の一部だと思い込んでしまう。ところが、その縄をするりと抜けて、風のように生きた女性がいた。宇野千代である。

恋をし、別れ、結婚し、また別れる。幾度も人生の岐路にたちながら、彼女は過去に居座ることをしなかった。人はそれを奔放と呼び、あるいは身勝手と評した。しかし、彼女の自由は、単に欲望のままに生きることだったのだろうか。

幼い千代には、暴君のような父がいた。ある時学校で「父」という題で作文を書くことになった。千代は、父がいかに横暴で、理不尽な人間であるかを書き始める。ところがある夜、厠に立った彼女は、縁側で籠の中のカナリアをじっと見つめる父の横顔を目にする。そこにいたのは、いつもの暴君ではなかった。小さな命を見つめる、一人の寂しげな人間だった。千代は作文の最後に、こう書く。「そのときの父は、暴君ではない父でした」（朝ドラ『ブラッサム』より）

人間とは、なんと不思議な存在なのだろう。優しい人の中にも残酷さがあり、残酷な人の中にも優しさがある。10 歳ほどの少女が、すでにそのことを見抜いていた。そして、ここにこそ、後の宇野千代の自由の原点があったのではと思う。人を一つの物差しでは裁かない。それは同時に、自分自身を一つの物差しに閉じ込めないということでもある。

人生には、思い通りにならないことが次々と訪れる。愛した人が去り、信じていたものが崩れ、昨日までの幸福が、今日には失われる。しかし千代は、失ったものを数えるより、いま目の前にある人生を生きようとした。訪れるものを、そのまま受け入れる（Accept what comes）。それは運命への服従ではない。起こった出来事を否定することに人生を費やさないという、静かな決意である。

千代の小説『おはん』には、愛するがゆえに身を引く女性が描かれている。愛しているから、そばにいたい。しかし、愛しているからこそ、離れることもある。人の心は、そんな矛盾を抱えている。愛することは、所有することなのか。相手を自分のもとにつなぎ止めることが、愛の深さを意味するのか。失いたくない。変わってほしくない。いつまでも自分のものであってほしい。その願いが強くなるほど、人は自らをも縛ってゆく。映画『おはん』のラストシーン、おはんが、一人旅立ってゆく姿には、成長し自立した女性の強さが、画面いっぱいに表現されている。

千代は決して傷つかなかった人ではない。傷つきながらも、人生を閉ざさなかった人なのだろう。縛られている自分に気づき、その縄を少しずつ解いていった。果たして、自由とは、人生を自分の思い通りにすることなのだろうか。思い通りにならない人生を、それでも愛することではないだろうか。そして、人生の終わりに近づいたとき、私たちは何を手放し、何をもって旅立つのだろうか。

宇野千代という自由、それは**「人生、思い通りにならない。だから、面白い！」**

＜事 例＞
NHK 朝ドラ『ブラッサム』より、幼年期の千代
NHK 知恵泉「宇野千代」ぶれない人生
朝ドラ主演、石橋静河インタビュー
千代の代表作『おはん』10 年かけて」昭和 32 年刊行
歌・五木ひろし『おはん』

円了のホームページ: www.enryo.jp

